

選考委員会総評

委員長 大石 芳野（おおいし よしの）

奥山淳志さんの『BENZO ESQUISSES 1920-2012』が、今回の林忠彦賞の冠になりました。絵のイメージに沿った写真と、詩的な構成に魅せられます。

数年前にも、弁造さんのポートレートを入れた暮らしぶりのドキュメンタリーの写真集がありました。それも魅力的でした。今回の『BENZO ESQUISSES 1920-2012』だけ拝見しても、奥山さんの気持ちが弁造さんの中に入り込んでいるし、弁造さんの気持ちが奥山さんの中に入り込んでいる、そういう一冊になっていると思いました。

絵の複写が多いですが、単に複写しているわけではなくて、弁造さんが住んでいた山小屋のようなアトリエの周辺にある植物などを絵に重ね、影としても写し込んでいます。そういう撮り方を私もたまにする好きな手法です。この度は、特に絵の複写がたくさん出てきて、画集のようにも見えますが、実はそうではない点がこの写真集の特徴になっています。写真集の途中には、弁造さんが生きておられた時の情景、風景、草花なども挿入し、住んでおられた雰囲気滲み出ています。雨が降っていたり、光が差していたり、といった気象の変化も写し撮っている工夫もいいです。

巻末の方に弁造さんのポートレートとかスナップ的な写真も組み込み、奥山さんは、弁造さんへの気持ちにピリオドを打てたという気持ちになったのではないかと写真集を見て思いました。全頁にわたって詩情豊かな雰囲気があり、かつ、シャープな表現力です。

奥山さんの性格と弁造さんの性格がぴったり合っていて、相性が良かったという要素が大きいのでしょう。写真には出会いは欠かせませんが、そればかりではなく、被写体との相性によってかなり写真が違ってくると思います。私もそう感じながら撮影していますが、奥山さんと弁造さんとの出会いは、本当に運命的な出会いだったのでしょうか。奥山さんが自分の心の中に弁造さんを引き込むことができた証の写真集と言えるでしょう。

林忠彦賞に選ばれてよかったと思う一冊です。